「モンゴルで学んだこと」
—JICA「モンゴル教員再訓練プロジェクト」に参加して—

浅井和行
（京都教育大学）

Everything I learnt in Mongolia
—In the Mongolian Teachers Re-training Project by JICA—

Kazuyuki ASAI

2004年11月29日受理

抄録：JICA（独立行政法人国際協力開発機構）による「モンゴル教員再訓練プロジェクト」の現地調査に短期専門家として参加した。11日間滞在する中で，モンゴルの教師，子どもたちが一生懸命学習に取り組んでいることが分かった。教員研修に支援を行う中で，現在の日本の抱えている教育課題の参考になることが学べた。

キーワード：現職教育，モンゴル，学力

Ⅰ．はじめに

筆者は，平成16年（2004年）9月1日から9月11日までJICA（独立行政法人国際協力開発機構）による「モンゴル教員再訓練プロジェクト」の現地調査に短期専門家として参加した。その折に学んだことを紹介する。

はじめに，「モンゴル教員再訓練プロジェクト」について簡単に説明しておく。このプロジェクトは3年計画で行われているもので，今年はその2年目に当たる。1990年頃まで社会主義体制であったモンゴルが民主化され10数年たった。社会主義体制下における教師の社会的地位は高く，管理色は強いものの，財政的にも質的にもかなりレベルの高い現職教員研修が行われていた。けれども，民主化後財政的裏打ちがなくなり，現職教員研修はあまり顧みられなくなり，教員の給料も5分の1くらいになった。そこで，モンゴル国の要請を受け，日本が現職教員研修について支援することになった。全国的に意味のあるプロジェクトにするために，中央からだけではなく，21ある県の教育長や指導主事の代表に1年に10人ずつ3年計画で（3人は中央から，7人は各県から）日本に来てもらって日本の教育の理念を伝え，実態を見てもらうことになった。考え方を押し付けるのではなく，日本の成功や失敗について語り，モンゴルの文化や教育習慣に生かせるものを検討してもらうというのがこのプロジェクトの趣旨である。筆者たち短期専門家の役割は日本での研修会を企画・運営することで，実際に講義をしたり，ワークショップに参加したりして，約1ヶ月の国内での取組を行った。今回のモンゴル訪問は，大阪で行った本年度の研修の成果を見届け，現地研修会のお手伝いをするため行ったものである。現地では，教育省やJICAの現地事務所と連絡をとりながら，2つの県の研修会と首都ウランバートルでの交流会に参加した。研修会には県の管理職の先生のほとんどが参加していて，日本で研修を行った代表者の講義や日本の専門家の講義，質疑応答などが行われた。会場は熱気に包まれ，教育を立て直して国を再興したいという情熱が溢れていた。JICA現地事務所が企画した交流会は大学，教育省，現職教員，青年海外協力隊員等いろいろな立場の教育関係者が一同に会し，これからの国作りについて語り合う場作りの役割を果たした。

Ⅱ．活動内容

＜第1日（9月1日）＞

ソウル（インチョン空港）経由でウランバートル国際空港に到着。JICA鶴原所員の出迎えを受ける。

＜第2日（9月2日）＞

午前

・JICAモンゴル事務所で，神崎所長，鶴原所員，エンヘトウルフール所員と打ち合わせ

本研修会の予算について話し合った。研修会開催に必要なものを帰国研修員から教育省に申し出るように連絡したが一部しか要求が上がってきていない。要求を出してもらってJICAとしての支援が必要な部分については検討していきたいという話が，神崎所長，鶴原所員からあった。

内海専門家（大阪大学教授）がモンゴルの先生たちは何を必要としているかを聞いたところ，鶴原所員から紙，チョーク代が学校から出ないので，先生たちが自費で購入しているという話があった。研修会で使用するパソコン，液晶プロジェクタとともにどのようにすれば供与できるかを検討することにした。他には，元素記号一覧表などの教材も必要としているということであった。教員研修ガイドラインについても示唆を得たいということであった。

今後のモンゴルについて話しているときに，ゲルの中でのインターネットアクセスのことが話題になった。電線のインフラよりも早いのではないかという話をした。

内海専門家からこのプロジェクトの副産物として，テレビ会議を計画していることが報告された。実施日は，9月8日と9月14日で，大阪大学のチームが9月4日に到着する予定。

午後

・JICA車両にてヘンティー県ウルドウルハーンに向け出発，午後7時30分到着。

ドルジン教育文化局長（帰国研修員），エルデネトウグス社会政策部長に聞き取り調査を行う。

○ドルジン教育文化局長への聞き取り調査

ヘンティー県の人口は，7万人でアイマグセンター（県庁所在地），ウルドウルハーン1.3万人，5つのバグからできている。1つのバグは200世帯で5バグを4つの学区に分けている。そこに，10年生の4つの学校がある。幼稚園は5つである。職業訓練校は1校あるが，教員養成校はない。ドルノト県には教員養成校があり，ヘンティー県の小学校の教員養成はそこで行う。

これまでは8歳児入学であったが，2004年9月1日から7歳児の入学が開始された。教室数が足りないので，小学校と幼稚園にいる。幼稚園には小学校から算数と国語の先生が出向いて教えている。新1年生のカリキュラムは新しいものである。

2008年の9月1日からは，6歳児が入学する予定である。しかし，親のニーズが強いため，実施が早まる可能性がある。

「なぜニーズが高くなっているのか」

①保護者が高学歴化したために，子どもへの教育熱が強い。

②就学前教育が普及してきたために，早期入学への要求が高い。

③子どもの成長を争う気風がある。

うちの子は，4歳なのに本が読めると自慢し合う。カリキュラム内容に関しては，シラバスができて，教育省へ提出されている。印刷に関しては，JICAが支援した。

統一試験は，4,8,10年の終了時に行う。新カリキュラムでは，5,9,11年終了時になる。

＜第3日（9月3日）＞

研修会

多数の参加者を得て定刻に開始された。

○ドルジン教育文化局長「教頭研修プログラム」

教師の81%が女性である。ヘンティー県には遠隔教育指導主事やソーシャルワーカーが配置されている。モンゴルでは，生徒の数で学校の予算や教師の給料が決まる。そのため，僻地の学校には誰も行きたがらない。

日本で学んできたことについての説明があった。規則をしっかり守る国民であった。子どもたちが自分できち

んと靴を並べることができていた。また，教師のコミュニケーション能力がすばらしかった。また，障害児教育の考え方が参考になった。

○エギマー教育文化局長（ボルガン県）「ボルガン県の取り組みの紹介」

インフラは整ってきている。12名から14名の教師が不足しているが，他の県と比べると恵まれているほうである。しかし，物理の教師とITの教師が不足している。

日本では，担任を長い間経験して校長になるが，モンゴルでは，若い校長が多い。この点については検討していかなければならない。日本では，ゲストティーチャーやアンケート調査などについて学んだ。子どもたちが思いやりの心を持つよう育てられていたのが印象的だった。

○浅井「日本の子どもたちの学び」

以下の4点について話した。①教育観,②学力,③評価（ポートフォリオ）,④実践例1，2

教育観は，教師の教え込みと子どもの自主学習の間で揺れている。それが学力観につながり，テストではかれる実体的学力と，テストではかれないまとめ方，表現の仕方などの機能的学力にわけて考えられている。評価も，子ども自身，相互，教師から，保護者からと多様なものが生かせるポートフォリオについて説明した。

その後，6歳児（小学校1年生）と11歳児（小学校6年生）の教育実践事例を紹介した。

○内海専門家「日本の教育経験」[1)]

JICA制作のプレゼンテーションファイルを見せながら，日本の教育の概略について説明があった。

○ヘンティー県で出た様々な質問

・障害児教育について（←内海専門家）
日本の教師の努力で少しずつよくなった。日本では，障害のある子どもは，普通学級，障害児学級，養護学校などで学ぶ。障害のある子どもたちにも学ぶ権利があることを忘れてはならない。

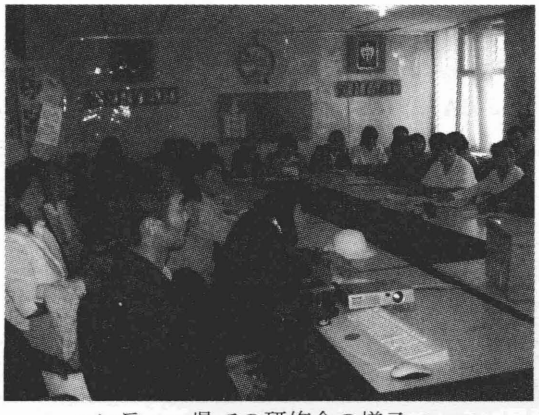
・女性の地位（←内海専門家）
だいぶ良くなってきているが，日本はまだまだ男性中心の社会である。

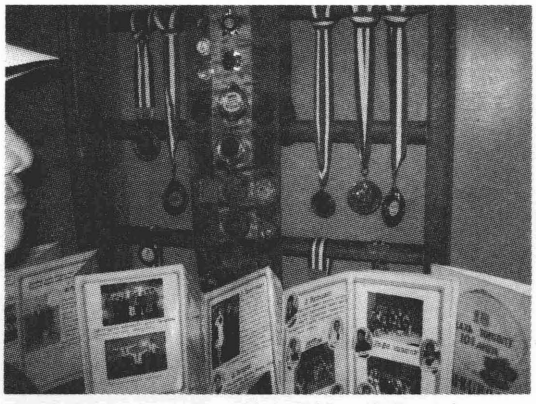
・上司への反抗（←内海専門家）
日本ではほとんど見られない。職場ではハーモニーシステムでうまくやっている。

・僻地教育について（←浅井，内海専門家）
日本では，僻地手当てを出す。日本全国の教師はほぼ同じ給料である。そして，犯罪をおこさない限りは，ほとんどやめさせられることはない。

・個別試験（←内海専門家）
現在日本では個別試験は行われていない。

・教師の評価（←浅井）
教師は守られているから高いレベルを保つことができる。


ヘンティー県での研修会の様子


ハン・ヘンティー統合学校の獲得メダル

［ハン・ヘンティー統合学校（スフバートル校長）］

教員数42名，事務職員14人，生徒数900名

教師の中でマスターを取得しているもの1名，取得中のもの2名

政府のモデルスクールに指定されている。

ワールドビジョンというNGOのプロジェクト（教育方法の改善）を行っている。

教員が夏休み（6月末から8月末まで）を効果的に使用できるように支援している。旅を奨励し，旅先で理科の教材，たとえば，岩石，植物などを持ち帰り，指導に使う。

すべての教員を平等に支援している。

数学と化学，物理とモンゴル語のたて文字に力を入れている。モンゴル語のたて文字では，アイマグ全体の義務教育のコンクールで第1位になった。なぜそのような成績が得られたかというと，教頭のマネージメントがよかったからである。

・ヘンティーは数学がよいと言われている理由

かつて数学の授業時間は非常に多く，内容も多かった。生徒は消化不良を起こしていた。そこで教頭は，時間を減らして，新しいカリキュラムに合わせる形で，教科内容を再編成した。また，生徒が学習に参加するような教育方法をとった。そして，子どもの学習力に着目して指導した。その結果，成績が劇的に上がった。

○ミニコンサート

学校というよりは，アイマグ文化センターでプロが歌や踊りの指導を行っている。そして，音楽の先生は低学年の子どもたちを中心に，合唱団や舞踊団を組織して，コンクールでの上位入賞を目指している。

○ゲル訪問（ガンゾリグ家長）

南アフリカからイギリスのボランティア・オーバーシー・サービス（BOS）で女性が英語を教えに来ていた。

内海専門家，エンヘトウルフール所員，浅井の3人でヘンティー県での活動の総括を行う。



モンゴルの民族衣装を着せてもらった内海専門家と筆者

＜第4日（9月4日）＞

ホテルを8時40分に出発，ドルジン文化局長に挨拶し，ウランバートルに向かう。

午後5時にウランバートルに到着。土曜日で閉まっているJICAモンゴル事務所にエンヘトウルフール所員の鍵で入り，メールチェックとウブス県での研修の準備を行う。

＜第5日（9月5日）＞

午前5時30分にホテルのロビーに集合し，飛行場に向かう。あいにくの雨のため，飛行機が飛ばないかもしれないということを聞くが，午前7時に何とか飛び立つ。プロペラの双発機で，航空券には座席が指定されていたのだが，完全に自由席で，乗客は好きなところに座っていた。そして，舗装されていない滑走路に離着陸する時にシートベルトをつけない人がたくさんいたことに驚いた。

午前10時に飛行場に到着。ウランゴム唯一の発電機のあるファイブスターホテルに着く。

会食の間に，いろいろな聞き取り調査を行った。2 週間前から，ロシアからの送電がストップし，停電していることを聞いた。モンゴルの西部 3 県では，今年の選挙で政権が変わってからロシアに電気代の支払いをしていないため，送電をとめられているらしい。11 月までこのままかもしれないという話も聞く。この国の 11 月は，マイナス 25 度程度まで気温が下がる。そうならないことをみんなで願った。また，教育文化局の組織の概略についても聞いた。まず幼稚園について，幼児教育担当の指導主事に聞いた。県内に 24 の幼稚園があり，80 人の教職員が働いている。そこに，5,000 人の園児が通ってきている。そのうちの，60%が遊牧民である。地方で幼稚園に通えない子どもたちのために，夏休みに移動教室を行い，教えている。しかし，教室も教師も不足しているというのがウブス県の現状である。教育文化局のスタッフは 16 人で，全員ウブス県の出身である。

＜第 6 日（9 月 6 日）＞

ウブス県庁での研修会

ウランゴムは，町全体が停電していた。モンゴルの西部 3 県は，ロシアへの電気代の支払いが滞っているため，送電を止められている。ソムの学校には校長，教頭，ソーシャルワーカーが配置されている。

○バッツーフ教育文化局長「日本で学んだこと」

・日本社会の良さ・・・教育の良さ→社会の発展，計画的な社会活動

日本のことを真似するのではなく，モンゴルにとって大事なものを取り入れることが大切である。

人々の気持ちを考えて，行動することが日本のよさである。

法律を良く守っている。創造力を重視している。思いやりも大切にしている。

環境問題も解決されてきている。豊かなモンゴルの自然を守っていこう。

・日本の教育

教員になるための要件が多い。総合的な力が必要である。

教員を教育委員会から派遣している。教員異動がある。

公立学校の質が良い。教員の給料は高い。給食がある。子どもたちが集団で食事をするなど，温かい環境が用意されている。

日本には，特級クラスはない。モンゴルでは，成績の良い子だけ集めて学習させることがある。

モンゴルには越境入学がある。

教員のコミュニケーションを大切にしている。子どもたちに優しく接している。

体育の授業が充実している。

靴のそろえ方がきちんと指導されている。

TT（ティームティーチング）にも取り組んでいる。他の学校の教員とも協力している。

今のモンゴル人は温かく人を迎える人が少なくなってきた。日本人はとても親切である。いつも親切である。相手を感じながら人に接している。物事を行うときに一人でするのではなく，協力して行う。

規則をみんなが守ってきたから今の日本の発展がある。健全な肉体のもとに美しい心が宿る。どんな時にも冷静に対応する。人を一人きりにしない。桜を愛し，温かい心を持っている。遠慮する心がある。

計画し，分析し，自分の仕事をしている。

正しい食生活をしている。栄養を考えている。健康的かどうかをいつも考えている。

テレビにも同じことが言える。日本ではバラエティー番組や教養番組が多い。

教師が一人ひとりの子どもの状況を把握している。教員の質が良い。

一人ひとりについて詳細な評価がある。

教頭が財務担当をすることもある。

何点取れたかではなく，何を学んだかを重要視している。

○浅井「日本の子どもたちの学び」・・・何枚かの写真をいれた以外は，ヘンティー県とほぼ同じ

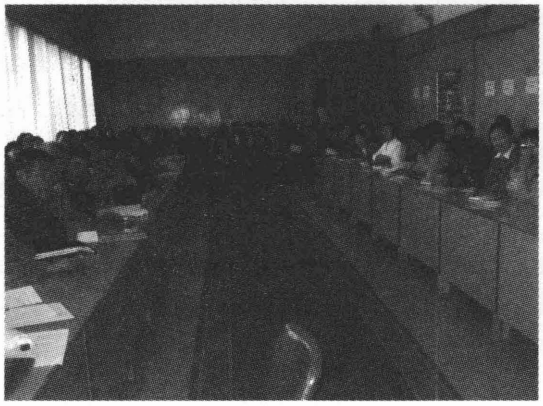
○内海専門家「教員研修と日本の教育経験」

○ガンバット指導主事「日本の教育システム」

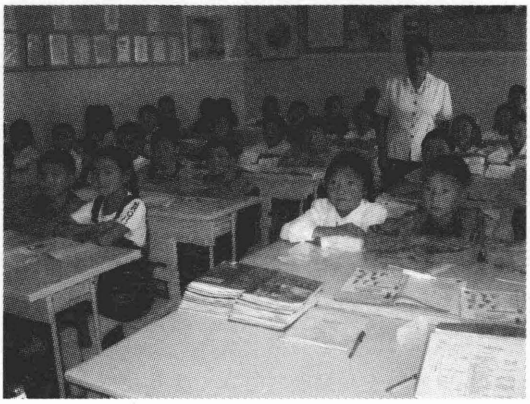
学校のカリキュラムをしおりにして，保護者に示している。

学校行事への保護者の参加，ゲストティーチャーとしての授業への参加

PTAの学校運営への参加



ウブス県の研修会の様子



同じ姿勢で一生懸命学ぶ小学生

計画→実行→評価

自己評価，校長の評価，同僚の評価，子どもたちの評価

学校の権限と学校の責任

教師の権利が守られている。

教員免許　専修免許，一種免許，二種免許

同じ給料，残業手当はなし

副業をすることはできない。

責任感が強く仕事に全力を尽くしている。

カリキュラムは学習指導要領をもとに各学校で作る。

モンゴルは二部制だが，日本の子どもたちは朝から夕方まで学校にいる。

日本から取り入れたいもの　教員免許，総合的な学習の時間

○内海専門家からのコメント

プレゼンテーションがすばらしかった。

日本の教育にも良い点と問題点とがある。

日本の教育の良いところは，障害児教育である。これは義務教育である。どのような障害のある子も学ぶ権利がある。また，教師の質の高さも良いところである。

教師の給料は高いが，物価も高いので，生活は楽ではない。家はなかなか買えない。モンゴルのゲルを輸入したいくらいである。教師は尊敬される仕事でよい仕事である。

今の若者は，給料ではなく，やりがいがあるかどうかで仕事を選んでいるようである。

○先生方からの質問

・10人しか子どもがいなくても学校を作るのか。

そうだ。少なくとも2人の教師が派遣される。予算も必要な部分は出る。給料も日本全国同じである。

・通知表

総合成績はない。

・教師の評価

給料には関係ない。見えないところもある。

・就学前教育

幼稚園と保育所

・障害児教育

普通学級，障害児学級，養護学校，院内学級

・評価システム

補助簿（点数，様子），週案，指導要録（学校保管），担任の役割

［第三 10 年生学校（トーヤ校長)］

小学校は 1970 年にできた。1982 年に中学ができ，1988 年に現在の 10 年生の学校ができた。現在の生徒数は，928 名。58 クラス，2,200 名の収容規模である。2 部制で午前が 5,7,8,9,10 年生，午後が 1,2,3,4,6 年生である。78 名の 7 歳入学生があり，27 名は，2 年生のクラスに入っている。今年度から始まった 0(1)年生は，2 クラスである。第四幼稚園には，35 名が通っている。国語と算数の教師が教えに行っている。

［第三幼稚園］

1983 年にできた。504 名定員で 260 名が通っている。先生は 8 名である。園長は，デジッドウマ園長。規則では 1 クラスの人数は，25 名であるが，現在の人数は，一クラス 40 名以上になってしまっている。3 歳（2 歳 6 ヶ月から）から 7 歳の子どもが通っている。7 歳児は 2 クラスで 81 名が通っている。1 日 2 コマずつ小学校から先生が教えに来ている。(国語，算数)

遊牧民は車などを知らなかったり，表現することを恥ずかしがったりする。逆に，中央の子どもたちはラクダを知らないというようなことが起こっている。食費は 50%を国が補助している。1 年 7,200 トウグルクなので，3,600 トウグルクが保護者負担になる。

［ザゲルソム中学校］

はじめにドミトリーを見せていただいた。60 人の低学年の子どもたちが生活している。

学校としては，360 人の子どもたちが通っていて 18 人の教師が勤務している。そのうち男性教師は 2 人である。学校の建物は，1965 年にロシアによって建てられた。1979 年に，収容人数 2,500 名の学校として始まった。

ニュージャージーから英語教師ボランティアが来ていて，6,7 年生を教えている。アナライザーや 4,5 台のパソコンがあり，設備としてはなかなかのものである。

＜第 7 日（9 月 7 日）＞

午前 8 時 50 分発の飛行機でウランバートルへ向かう。やはり電気なし。

午前 1 時頃ウランバートル到着。昼食をとり，ウランバートル第 18 中学でのテレビ会議リハーサルに参加する。

＜第 8 日（9 月 8 日）＞

午前中 JICA 事務所で業務連絡を行う。

国立モンゴル教育大学学長との会談を予定するが，秘書の連絡間違いでキャンセルされる。

ウランバートル第 18 中学でのテレビ会議に参加した。

＜第 9 日（9 月 9 日）＞

○バトボルト教育省初等中等局長（アルタンツエツエグさん同席）への聞き取り調査

昨日の TV 会議は 2 新聞，3 テレビが報道した。

次期のプロジェクトについて話し合った。昨年度の教員再訓練プロジェクトでは，3 回のフォローアップ研修を行ったものもいる。研修前に基礎知識を国内で授けている。

小学校，中学校，高等学校にフォーカスを当てる。情報教育，障害児教育，僻地教育にフォーカスを当てるなどが考えられる。これを 3ー5 年のプロジェクトで考える。職業高校，コース別学校などについても知りたいという話があり，高等専門学校や高校の見学を考えられるといいのではないかと思った。

今回の教育改革について意見交換を行った。選挙が終わってないので，人選が終わっていない。新制度の導入については，新スタンダードについて話し合った。専門教育（コース別）や特別教育など高校レベルでの教育の変化が起こっている。日本の「総合的な学習の時間」について支援がほしい。学力低下論争に陥らないようにしていかなければならない。2006年からの実施が予定されている。学校見学がしたい。

○小出専門家への聞き取り調査

・プロジェクトについて概略説明

カウンターパートを2人くらい選び，日本で1ヶ月くらい研修してもらう。帰りに，笹井専門家と中川JICA所員が同行予定。次期プロジェクトについて検討する。

・小出専門家の現状報告

教育改革は教育内容である。文部科学省内では対応が難しいので，大学関係者で対応している。各アイマグをまわって見てみた。

モンゴルの教育は教え込みできている。社会主義的エリート教育である。それに対する不満が学校現場から出てきている。

教育スタンダードの案は出てくるが，大学の研究者が自分たちの考えで作ったものである。学校現場で検証はされていない。1998年のスタンダードは，内容だけである。それの反省に立って，今回のスタンダードは学習方法，指導方法についても考えるようになっている。けれども，各学年の内容は，不明確になってきている。

学習教材（自己学習できるようなワークブック）を作る必要がある。教師用のガイドブックも作る必要がある。有用性が求められている。具体的なものと抽象的なものを結び付けて教えようとしている。教科書を複数作っている。試行である。学校で使ってみていいものを選ぼうとしている。教育大学に数学実験センター，国立大学には理科実験センターを作っている。公文と水道方式を参考にしている。教科書は，生徒の視点に立って作ろうとしている。来年にできる。教科書ができた学年から配っていく。来年度中には配布完了予定である。JICAの専門家として，授業法の開発についての助言を求められている。学習教材と教師用のガイドブック作りが求められている。JICAの指導用改善プロジェクトが進んでいない。教師再訓練プロジェクトと指導法改善プロジェクトが両輪になるだろう。理科実験については，北海道の理科実験センターから先生に来てもらう予定である。北海道では，身近な材料を使って実験できる取り組みをしているので，モンゴルでも活用できる。退職校長にボランティアで来てもらって授業をしている。発問がうまく，子どもたちもモンゴルの先生たちが想像できないような返答をしている。モンゴルの先生たちは，力を持っている。ソ連や東ドイツに留学した人たちは，アカデミックな力を持っている。

国別研修は非常に有効である。ネットワークができつつある。ナランツエツエグさんが中心になって現場の教師を集めて研修を行っている。ダルハン，トブ，ヘンティーなどいくつかの県で研修会を行っている。現地指導主事と協力して一緒に行うべきであると思う。教員のサークル，研究会を組織することを勧めている。ダルハンで作った。

研修員に研究会も見せてほしい。悉皆研修と自主的な研究会があることを紹介している。それを見学させてほしい。研究会の組織論も教えてほしい。また，教育委員会ではないサークルについても紹介してほしい。校長会も紹介してほしい。担任教師のほうが校長よりも給料が多い。

ADB（アジア開発銀行）35校とさくらプロジェクトがIT機器を配布している。メンテナンスできる教師がいるところは，続いている。だから教育大学にIT実験センターを作った。小学校実験センターを含めて4つの実験センターができている。ボランティアが1年間無償で手伝ってくれている。モンゴルは就学率も高く，教師も力量を持っている。

国別はいい。青年招聘は検討が必要である。違う人がいいのか，ネットワークの核になる人がいいのか。アイマグの局長クラス，指導主事がいい。校長レベルでは難しい。

僻地校を見せてほしい。地域との結びつきがすばらしいと帰国研修員が言っていた。

カリキュラムの変遷を紹介すると有効である。

＜第10日（9月10日）＞

○JICA事務所で打ち合わせ

［第84中学校（10年生学校)］

1989年に設立された。3,100人の子どもが通ってきている。89人の教師が働いている。

日本語，英語，数学のエリート養成コースがある。コンクールで優勝し，バレーボールの全国大会でも優勝した。

岐阜県の小学校と姉妹提携を結んでおり，10日間にわたる学生や教師の派遣を行っている。

一クラスは，30,35,40,50,60人といろいろである。週に一時間の美術の時間で，教科書を使って教えている。どの子も個性的な絵を描いていた。絵は，展覧会をして紹介している。

研修長は教務主任のような仕事をしているようである。

1〜4年，5〜8年，9〜10年の仕事が分かれている。

モンゴルの学校には，ガムのようなものをかんでいる子どもがいた。

［第63中学校（ムッフォツル校長)］

この学校は今までの学校と違って障害児をたくさん受け入れている学校であった。

9〜20歳の子どもが同じ2年生の教室で学んでいた。ウランバートル市立の軽度知的障害のある子どもと貧困家庭の子どもが通う学校で全校生徒は320人である。一般の学校で，ボトムカットされた子どもも来ている。また仕事，医療，教育を求めて地方からウランバートルに移り住む人も増えている。この学校は授業料（正確にはモンゴルの公立の学校では授業料を徴収しないが，公立でもよりよい教育条件を作るためという理由で寄付金を集めている学校が多い）を集めていないため，貧困家庭の子どもたちも通うことができる。

ウイスクというテストによると，この学校の子どもたちの50%が正常域（といっても，低いところに偏りがある)，30%がボーダーライン，20パーセントが障害児である。

この学校はモンゴルの多くの学校と同じように二部制である。午前中（8時から）は8〜10年生，午後（1時から4時半）は，1〜7年生である。大きい子どもが午前中に割り振られているのは，冬場は朝が真っ暗なためであると考えられる。（鶴原所員談）

ウランバートル市内には，約300人の在宅の子どもたちがいると考えられている。この数字は，発達遅滞だけの数字のようである。身体に障害のある子どもの中で，家庭が裕福な子どもは市内のセンターに通うことができる。

3年生の描画の授業を見せていただいた。午前中に訪れた第84中学校とは違い，非常に画一的な絵であった。ある国の教育を考える時に，ほんの一部の授業を見て語ることの危険性を感じた。子どもは，障害のためか，教育方法のためか，教科書と同じ絵（夏のイメージとして，山が二つあり，遊牧民の男の子と女の子が立っていて，太陽が輝いている絵）を定規，分度器などを使って描いていた。

次のクラスで田島青年海外協力隊員の指摘する幾人かのノートを見せてもらった。キリル文字が美しくノート一面に書かれていた。田島隊員が「この字はどう読むの？」と聞くと，ひとつも答えることができなかった。ただ美しく写すより，ひとつの言葉でも体験と結びつけて読み書きできるようにするべきではないかと思った。

寄付金がNGOなどから入っても，教材に回らずに教師の懐に入るようである。これは，教員の給料が少ないことと，教材費が教師持ちであるということに起因していると考えられる。授業後の交流会でも，どうすれば教師一人当たりの子どもの数を減らし，給料を減らさないかという話が出ていた。

法律による学級定員は，普通学級が40〜45人，特別学校学級が12〜15人であるが，場合によっては，50人，60人のクラスもある。

夕食をアルタンツエツエグ，ナランツエツエグ帰国研修員ととり，その後の研修について報告を受ける。

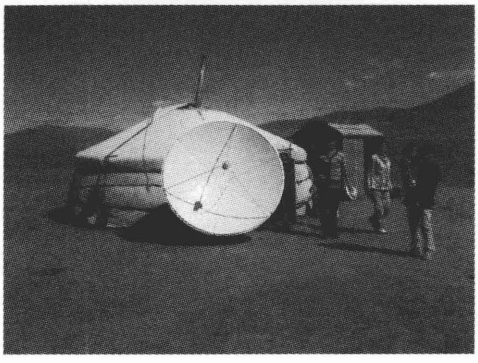
＜第11日（9月11日）＞

朝5時にホテルを出発し，空港へ。北京経由で大阪に18時着。

Ⅲ．モンゴルで学んだこと

1．モンゴルのメディア環境

JICA の車でヘンティー県の県庁所在地ウルドウルハーンに向け見渡す限りの草原をひた走っていたときだった。ゲル（遊牧民が住んでいる白く丸いテント，中国語でパオ）の前に2メートルくらいのパラボラアンテナがすえつけてあった。すぐに車を止めて何に使うか聞いてみると，発電機で電気を起こし，衛星放送でオリンピックを見ていたということだった。携帯電話も普及しており，ゲルの中でインターネットにつながる日もそう遠いことではないかもしれない。



ゲルとパラボラアンテナ

2．日本の学校のことを客観的に見ようとする目が育った

モンゴルの授業の様子は，完全な教え込みに見えた。けれども，学生に自己紹介をしてもらったときに個性豊かな自己表現に出会えた。授業は形だけで見てはだめだということがよく分かった。日本で問題にされていることの中にも，大事なことがかくされているかもしれない。物事の本質を見抜くことの大切さと難しさを実感した。

3．教師も子どもも一生懸命学習に取り組んでいる

モンゴルの教育で一番すばらしいと思ったことは，教師も子どもも一生懸命学習に取り組んでいることである。特に数学の学力の高さはすばらしいものだった。難しいと思ったことは，子どもの数によって学校の予算や教師の給料が決まることである。そのため，僻地校に教師の行き手がなかなかないということだった。社会問題としては，電力供給の問題がある。西部のいくつかの県ではロシアから電力供給を受けているため，代金の支払いができないとすぐに電気を止められてしまう。モンゴルは，夏の最高気温が40度，冬の最低気温が零下40度，年較差80度もある自然環境の厳しい国である。早く問題を解決しなければ，尊い命を失うことにもなりかねない。

4．筆者の変化

この出張を通して筆者の心に残った一番大きなことは，教員再訓練プロジェクトということで，現職教員研修について支援するという姿勢で参加した筆者が，モンゴルでの活動の中で，両国の教師が学び合うという姿勢が一番大事であると思うようになったことである。モンゴルの学校で体験したように，学校を参観する筆者たち大学教員に見えているのは，教育実践活動の一部に過ぎず，それをもって全体を判断することは危険である。これからの教育実践研究において自戒していきたいと思った。

Ⅳ．今後の課題

1．子どもの数によって教師の給料を決めることをやめること
2．上記とともに，中心部と周辺部で教師の給料に差が出ることを防ぐこと
3．障害児教育に力を入れること
4．僻地教育に力を入れること
5．総合的学習に関する研究

6. 研究会，サークル，校長会等の組織についての研究
7.「校内研修」について重点的に紹介すること

＜引用文献＞

1）独立行政法人国際協力機構（2004）「日本の教育経験」CD-ROM 版

＜参考文献＞

水越敏行，大隅紀和，菅井勝雄（1987）「アジアで教えたこと学んだこと」明治図書